

論 文

## 箕作元八と旧制中学西洋史教科書

Genpachi Mitsukuri and the historical School-textbooks of the old Middle-High-school

柳川平太郎 (高知大学教育学部)

HEITARO YANAGAWA

*Faculty of Education, Kochi University*

### ABSTRACT

"Kyoju-Yomoku" was declared in 1902 for the purpose of the textbook screening in Japan. This article aims to analyze the relation between this regulation and the school-textbooks on history, especially on European History for the first and second grade of junior-high-schools. Among many school-textbooks of the junior-high-schools we choose here those of an author, (Genpachi Mitsukuri), who edited a few text-books on history of Europe in 1899, 1902, 1907 and 1919. As he studied especially the history of the French Revolution, I tried to analyze the influence of his historical researches about the French Revolution on these school-textbooks.

Keywords: Genpachi Mitsukuri, Kyoju-Yomoku, School-textbooks

## I. はじめに

本論文は、戦前のわが国旧制中学校歴史教科書分析の一環として、明治後半期の代表的教科書から西洋史学者箕作元八の編纂書を取り上げる。箕作は、明治期に草創期の大学で西洋史教授に就任した著名な歴史学者で、日本の草創期西洋史学を支えた学者の一人でもある。しかも、箕作は戦前の指導要領にあたる教授要目の成立期にその審議会委員として坪井九馬三とともに教授要目立案に関わり、同時に自らも同時期の教科書執筆に携わっていた。明治後半期の専門学界と教科書叙述の関連を知る上でも興味深く、坪井九馬三とともに個別事例として検討必要な分析対象であろう。そこで本稿では、最初に箕作の西洋史研究者としての出発点とフランス革命を中心とする西洋近代史研究の過程を確認したあと、箕作の教科書以外の著作名を検討する。次いで、箕作が実際にどのような教科書叙述を展開し、他の代表的教科書叙述例とどの程度異なった特色ある教科書を編纂したのかを、箕作自身の主な研究領域である近代史、特にフランス革命史関連の教科書叙述を中心に検討していきたい。

## II 略歴と研究分野

箕作元八は1862年(文久2年)に、幕末日本で最も著名であった蘭学者の一人箕作阮甫の婿養子箕作秋帆の四男として津山藩江戸藩邸で生まれた。1888年(明治10年)には東京大学予備門卒業後東京大学理学部生物学科に入学し、明治18年に卒業とともに大学院に入学して私費留学生としてドイツのフライブルク大学で動物学を学ぶことになった。兄たちも長兄のロンドン大学(大学南校教授になったが早世)、次兄のケンブリッジ大学(菊池大麓、数学、東京大学教授・総長歴任)、三男のエール大学等(動物学、東京大学教授)の留学経験があり、箕作家兄弟として当然の進路でもあった。ところが、滞独中に生来の強度の近視から顕微鏡使用に困難を生じ、動物学研究が無理となったため、歴史学の研究に転ずることになった。その後チュービンゲン大学、ハイデルベルク大学、ベルリン大学等で学び7年間の留学生生活をおくった。

明治34年末、箕作は二度目のヨーロッパ留学より帰国し、翌明治35年おりしもドイツに帰国したリースの後任として東京帝国大学教授に任ぜられて、36年には文学博士の学位も取得した。明治37年に改革された文科大学では哲学・史学・文学の三学科制が取られたが、史学科三専攻(国史学・支那史学・西洋史学の名称であった)のうち、箕作は坪井九馬三とともに教授となり、助教授として村川堅固を擁したが、のち大正8年に没するまで17年間東京帝国大学教授として草創期のわが国西洋史研究の第一線に立ち続けた。

まず箕作の旧制中学関係教科書を確認すると、次の3種

6点が確認される(発行年次順、以下Noを全発行図書の出版年次順に付し、また後出の引用での参照の都合上、教科書については年次順にA・Bと略記することにする)。

No.1 西洋史綱 箕作元八・峯岸米造著(六盟館,1899以下, Aと略記)

No.3 西洋略史.本編 箕作元八, 峰岸米造著(六盟館, 1902,以下,B)

No.4 西洋略史. 附図 箕作元八, 峰岸米造 著(六盟館, 1902)

No.6 新編西洋史綱 箕作元八・峯岸米造著(六盟館, 1907,以下C)

No.8 西洋史教本 箕作元八著(開成館, 1911、以下、D)  
(没後直後の著述教科書と、その後の補訂(大類伸による)刊行本として)

No.23 新定西洋史教科書 箕作元八 編(東京開成館, 1919), 修正7版(以下、E)

No.30 西洋史教科書 箕作元八 編, 大類伸 補訂(東京開成館, 1924), 新訂

次に、教科書以外の著作で、西洋史に関する出版物として以下の書名が確認できる。

No.2 西洋史参照図画: 箕作元八, 峰岸米造著(六盟館, 1899)

No.5 歴史叢話 箕作元八著(博文館, 1907)

No.7 西洋史講話 箕作元八著(開成館, 1911), 訂正3版

No.9 西洋史新話. 第1冊ギリシアの撥乱 箕作元八著(博文館, 1912)

No.10 西洋史新話. 第2冊テーベの勃興 箕作元八著(博文館, 1912)

No.11 西洋史新話. 第3冊国土の経論 箕作元八著(博文館, 1912)

No.12 西洋史新話. 第4冊偉傑の雄飛 箕作元八著(博文館, 1913)

No.13 西洋史新話. 第5冊 偉国民の奮闘 箕作元八著(博文館, 1913)

No.14 南亭史説集 箕作元八著(目黒書店, 1914)

No.15 西洋史新話. 第6冊 武士道の華 箕作元八著(博文館, 1914)

No.16 西洋史新話. 第8冊 北方の流星王 箕作元八著(博文館, 1915)

No.17 西洋史話 箕作元八著(東亜堂書房, 1915)

No.18 西洋史新話. 第7冊 オルレヤンの乙女 箕作元八著(博文館, 1915)

No.19 西洋史新話. 第9冊 ペートル大帝 箕作元八 著(博文館, 1918)

No.20 史眼に映ずる世界大戦 箕作元八著(博文館, 1918)

No.21 一九一四年—一九一九年世界大戦史. 前篇 箕作

元八編（富山房, 1919）

No.22 一九一四年=一九一九年世界大戦史. 後篇 箕作元八編（富山房, 1919）

No.24 フランス大革命史. 前編 箕作元八著（富山房, 1920）

No.25 フランス大革命史. 後編 箕作元八著（富山房, 1920）

No.26 西洋史話 箕作元八著（東亜堂, 1920）

No.27 第十八世紀仏蘭西文化史・社会主義運動史 箕作元八著（富山房, 1922）

No.28 西洋海事史 箕作元八著（富山房, 1923）

No.29 ナポレオン時代史 箕作元八著（富山房, 1923）

No.31 文部省検定西洋史受験準備の指導 三橋直喜著（啓文社書店, 1928）

（目次より）：第二節 箕作元八先生談

このうち、教科書ではNo.2（B）が自らも委員として原案に関与した『教授要目』制定時期（明治35年（1902年）12月の直後明治36年からの時期）にあたり、特に『教授要目』準拠の教科書として準備された点でも注目される。箕作が教授要目に関わっていたのは、要目に先立つ明治31年の尋常中学教科細目調査報告委員会以来で坪井九馬三・三宅末吉・那珂通世等とともに「要目」策定委員会にも参画していた。「要目」成立後も検定教科書に関わる身として、教授要目制定以降も引き続き教科書編纂事業に従事し続けたのであろう。

### III. 箕作元八の歴史学研究と著作

大野真弓によれば、「日本の西洋史学はルートヴィヒ・リース博士、坪井九馬三博士、箕作元八博士の三人によって土台が据えられた」（『西洋史学への道』p.57）と言う。また、日本史に関する史学史ではあるが史学史研究の分野に大きな足跡を残した大久保利謙もその著『日本近代史学史』第3章西洋近代史学の輸入の章（p.269）において、「ドイツ史学の移植は、更らこの時代にドイツに留学した坪井九馬三・箕作元八博士等によって進められ、歸来やはりランケの学風が唱道された」と述べ、坪井とならんで箕作を日本の西洋史学建設者と位置づけている。

それでは坪井とならぶ箕作は、日本の西洋史学において具体的にはどのような成果をあげ、いかなる影響を及ぼしたのであろうか。

箕作と坪井は、ともにヨーロッパ留学を経験し、自ら当時の最先進ドイツ実証史学を学び、それを携えて帰国後に東京帝国大学で西洋史の研究・教育に携わった点で共通している。また、結果的にランケの高弟お雇い外国人リースがわが国に導入したランケ史学を、言わばリースの「同僚」あるいは「後継者」として担うことになった。

しかし、著作としては特に史学理論に集中し、個別西洋

史分野では専門書や啓蒙書をほとんど残さなかった坪井に比べ、箕作の場合にはフランス革命史やナポレオン、あるいは19世紀ヨーロッパ史全般の分野において多くの著作を著した点大きく異なる。確かに、大野真弓が記す如く坪井も大学の講義や個別論文では史学理論以外にも多くの論点を扱い貢献している。例えば、「西ローマ滅亡の情勢」「ダルダネル海峡問題の歴史」「十八世紀末フランスに於て常用した穀類及び果物に就いて」「独逸の膠州租借の動機に就いて」などその視野はこんにちで言えば社会的とも言える論題に至るまで広汎で、大学や学界における影響力は甚大であった。ただ、一般向け刊行物の面では、『史学研究法』『最近政治外交史』（全4巻）等に止まり、その点上記No.9からNo.29に至るような多くの著作を残した箕作の旺盛な執筆活動は、その死後の遺作刊行物をも含め、日本の西洋史学のみならず教育や一般啓蒙の面でも大きな影響を与えたと言え、特筆に値する。

具体的には、第一に、フランス革命史研究の本格化とその成果公表が画期的であった。箕作は文部省から派遣された自身の第二回目留学にあたって当初はドイツで研鑽したものの、後半をフランスでの研究生活にあてている。ここでは、当時のフランス史学、とりわけフランス革命史研究の第一人者（パリ大学フランス革命史講座初代教授）オーラルの講義にも直接接触し、また自身も精力的に史料収集に取り組んだ。その成果は帰国後の講義に結実したばかりか、晩年執筆され死後刊行の代表作『フランス大革命史』（刊行当時は前篇・後編の二巻本、現講談社学術文庫3巻本）として戦前歴史学における一つの最高峰を形作った。この書ばかりか、この分野ではナポレオン研究（No.29）も重要である。

第二に、刊行は没後のこととなったが、海事史研究のような特殊分野も開拓している。

第三に、フランス革命史研究において政治史中心のオーラル流革命解釈に対し物足りなさをも指摘しているように、箕作の史学研究には二回にわたるドイツ留学滞在時で直接接触していた文化史の潮流も取り入れた面が見られ、それは上述の『十八世紀仏蘭西文化史』や一連の『西洋史話』にも反映されている。

第四に、ほぼ同時代にあたる言わば現代流に言えば「現代史」そのものの第一次世界大戦への積極的言及が注目される。この視点と成果は後半生あるいは没後刊行箕作編纂教科書（一部大類伸により補訂）にも生かされていたと思われる。

第五に、上記『西洋史新話』に見られるような啓蒙書による一般への影響力の大きさは、『フランス大革命史』とともに史家箕作の名を一般にも知らしめていた。

このように、大学での講義や学界での指導的立場とともに、その知名度と影響力において箕作元八は坪井九馬三を

遙かにしのいでいた。従って、その箕作による教科書編纂は大変意義深かったと推測される。

それでは、箕作の教科書編纂・叙述においてどのような特賞が見られるのであろうか。以下、箕作の得意とするフランス革命史等に関する構成法や叙述内容を中心に検討しておきたい。

#### IV. 西洋史教科書の目次構成と叙述内容

ここではまず、最初の教科書上記Aと教授要目直後のBを中心に比較しながらそれらの目次を検討する。Bでは冒頭で「本書は文部省にて定めたる中学校西洋歴史の教授要目に基きて撰たり」と教授要目準拠を明記している。

##### A

###### 第一部 上古史

- 第一篇 太古西洋諸国興亡時代
  - 第二篇 ベルシア・ギリシア衝突時代
  - 第三篇 東西文化融合時代
  - 第四篇 ローマの大統一時代
- ###### 第二部 中古史
- 第一篇 中古初期
  - 第二篇 中古本朝
  - 第三篇 中古末期
- ###### 第三部 近古史
- 第一篇 エスパニア・フランス対抗時代
  - 第二篇 エスパニア強大時代
  - 第三篇 フランス強大時代
  - 第四篇 ロシア・プロシヤ発展時代
  - 第五篇 革命時代
- ###### 第四部 最近世史

##### B

###### 第一部 上古史

- 第一篇 西洋文明発生時代
- 第二篇 東西衝突時代
- 第三篇 東西文化融合時代
- 第四篇 ローマの大統一時代

###### 第二部 中古史

- 第一篇 西ヨーロッパ混乱時代
- 第二篇 政教大統一理想時代
- 第三篇 国家主義発生時代

###### 第三部 近古史

- 第一篇 イスパニア・フランス対抗時代
- 第二篇 イスパニア強大時代
- 第三篇 フランス強大時代
- 第四篇 ロシア・プロシヤ発展時代
- 第五篇 革命時代

###### 第四部 最近世史

- 第一篇 守旧進歩両主義衝突時代

###### 第二篇 民族的統一成功時代

###### 第三篇 世界政策維新時代

なお、各編別構成のうち、例えばCの「第3部：近古史」等では次のような章別編成で本文叙述が展開される。

- 第1篇 イスパニア、フランス対抗時代
  - 第1章 宗教改革 イスパニア、フランスの確執
  - 第2章 宗教改革の進行 トルコの西侵
  - 第3章 ポルトガル、イスパニアの植民政策
- ###### 第2篇 イスパニア強大時代
- 第1章 宗教改革の反動
  - 第2章 オランダの独立
  - 第3章 イギリスの主教改革
  - 第4章 フランス宗派の争
  - 第5章 三十年の役
- ###### 第3篇 フランス強大時代
- 第1章 オランダの隆盛及びその植民策
  - 第2章 フランス国家主義の確立及び外国侵略
  - 第3章 イギリス両度の革命
  - 第4章 イスパニア継承の役
  - 第5章 北及び東ヨーロッパ諸国の盛衰
- ###### 第4篇 ロシア、プロシヤ発展時代
- 第1章 東方の役 ポーランド継承の役
  - 第2章 プロシヤ勃興 オーストリア継承の役
  - 第3章 七年の役
  - 第4章 イギリス、フランス植民政策の衝突
  - 第5章 ロシアの侵略及び拓殖
- ###### 第6章 第十八世紀に於けるヨーロッパの風潮
- 第5篇 革命時代
  - 第1章 北アメリカ合衆国の独立
  - 第2章 フランス大革命初期
  - 第3章 大革命の進行 ポーランドの滅亡
  - 第4章 恐嚇政治時期
  - 第5章 大革命末期
  - 第6章 ナポレオンの覇業
  - 第7章 ヨーロッパ独立の役 ウィーン列国会議
  - 第8章 フランス革命時代に於ける各国植民地 太平洋探検
- ###### 第4部 最近世史
- 第1章 神聖同盟時期
  - 第2章 アメリカ諸国及びギリシアの独立
  - 第3章 七月革命及びその影響
  - 第4章 ドイツの関税同盟 イギリスの改革 ポルトガル、イスパニアの内乱
  - 第5章 東方問題
  - 第6章 二月革命及びその影響
  - 第7章 イギリス、フランスの同盟、極東の情勢

- 第8章 イタリアの統一
- 第9章 北アメリカ合衆国南北の争い メキシコの乱
- 第10章 オーストリア、プロシアの争覇
- 第11章 ドイツ、フランス衝突 ドイツ、イタリア統一完成
- 第12章 ロシア、トルコの役
- 第13章 ヨーロッパ、アフリカに於ける最近事件
- 第14章 アジア、アメリカに於ける最近事件
- 第15章 最近の進歩

次に、本文叙述の文章例として、例えば教科書冒頭の書き出し部分を比較すると以下の通り（以下頭注部に配置された小見出しをカッコ書きする。また、引用にあたっては、原著の縦書きを横書きに転記する上で便宜上と紙数の節約から年号を算用数字化して表記することもある）。

最初にA教科書の本文冒頭、始まり方を見ておこう。「伝へいふ、エジプトは紀元前四〇〇〇年の頃建国したりと。然れども歴史の確信すべきは第四王朝に始まる。当時エジプトは既に金字塔を建て象形文字を以て王者偉人の事蹟を録しき。

其の後紀元前二一〇〇年の頃ヒクソスと称する遊牧の蛮民アジアより侵入し全国を統治すること凡そ五〇〇年。エジプトの文化、ために大いに衰へしが、国人アームス義旗を挙げ、ヒクソスを国外に駆逐して王位に登り、文化漸く旧觀に回復しぬ。爾後三百余年間はエジプトの全盛時代にしてラメス二世の如き英主出て、外は屢遠征を為して版図を拓め、内は工芸美術を奨励して宮殿堂祠を建て以てエジプト史に光彩を添へぬ。

エジプトは気候炎熱なるに毎歳ニル河氾濫して膏土を遺し、人民も亦能く水利を応用せしを以て農耕の業夙に発達せり。これエジプトが早く文明の曙光を放ちたる一因なり。エジプト人は又牧畜の業を営み、諸種の工芸に長じ染織及び硝子製造等に巧なりき。建築は宏大壯麗を以て其特色とし、金字塔・方尖・獅身女面像等は実に千古の偉觀たり。文字は象形文字の外、別に其草体ありて、之を一種の紙（パピルス）に著し巻軸として保存せり。絵画と彫刻とは共に変化に乏しく、且同形の重複多くして意匠風致殆ど一律なるもの多し。

政治は王ありて万機を独裁し人民は僧侶・武士・平民の三階級に分れ、僧侶最も権勢を占め官吏・教師・判官等を兼ねて武士と共に貴族たり。

宗教は太陽をラーと称し之を最上の神とせしが、他の星辰及び動植物をも崇拜せり。又輪廻の説を信じ薬術を施して屍体の腐敗を止め、之を永遠に保存するの風ありき。

（以下略）」

これに対してBでは次のような叙述となっていた。

「エジプトの建国は紀元三・四千年の間にありて同第十

四十三世紀に至りては、大に富強の域に進みラメス二世の如き名君出て、外は四方を征伐して版図を拡張し、内は工芸美術を奨励し運河を開通し宏大なる建築を起こせり。

エジプト人は炎熱成る気候とニル河の定期氾濫とを利用して大に耕作の業を起し、かねて牧畜の業を営み、工芸の発達を致せり。その築くところの金字塔、方尖碑、獅子人面像、神殿等は（――\*引用者補足註記：ピラミッド・オベリスク・スフィンクスのこと――）今なほ残存して、実に千古の偉觀たり。象形文字及び絵画彫刻もまた古くより行はれ大に人文の発達に資したり。

政治上は上に独裁の王あり。人民は僧侶、武士、平民の三階級に分れ、僧侶最も権勢ありて高官榮職を専司す。宗教は最上の神を太陽とし、星辰動植物をも崇拜せり。また輪廻の説守るが故に死体に芸術を施しこれを永遠に保存しぬ。」

## V. 箕作元八の近代史研究と教科書叙述

箕作の主な研究分野となるフランス革命史に関しては、目次構成上かなり重視され、また叙述内容においてもユニークなものがあつた。まず、構成的には、次のような目次構成が初期から見られ、この構成は先に引用したBの目次構成でもほぼ同じ表現で踏襲されている。特に例えば「テールール」（恐怖政治）を「恐嚇政治時期」と章立てするなど、訳語は現代とは若干ことなるものの興味深い。

- 第2章 仏国大革命の初期
- 第3章 仏国大革命の進行 ポーランドの滅亡
- 第4章 仏国恐嚇政治時期
- 第5章 仏国大革命末期
- 第6章 ナポレオンの覇業
- 第7章 欧州独立戦役 ウィーン列国会議
- 第8章 仏国大革命時代に於ける各国植民地 太平洋探検

こうした、フランス革命重視論と独特な革命観は、一貫しており、のちに『フランス大革命史』前篇では、冒頭「フランス大革命史は同国史上最大の事件の記録たるのみならず、同時に全欧州革新の歴史たり。西洋近古史の総決算たり。而して又最近世史の源流たり」と述べていた。

フランス革命の原因と背景については、Aでは以下のように書かれていた。

「仏国大革命は欧州の世態を一変せる大事件なり。今其原因を考ふるに、革新文学の影響として各人皆着実なる改革を以て迂遠なりとし、破壊的精神盛なりし事、一なり。土地財産の分配、一方に偏し、貴族高僧は莫大の資産を有し、農民は赤貧洗ふが如くなりし事、二なり。商工社会は組合規程に束縛せられ、又内地に至る所に税関ありて交通貿易を妨害せる事、三なり。負担は上層社会に軽くして下層人民に重く、加ふるに其徴収の法彼に寛大にして是に酷な

りし事、四なり。売官の制ありて冗官多く貴族等高官の官位を占め、実務を執らず行政紊乱して百弊叢起せし事、五なり。朝廷の華奢と連年の戦役とに国財を消し、国債山積して財政困難其極に達せし事、六なり。米国の独立を見て座ろに其壮挙を喜び其制度に心酔し国情歴史を顧みずして直に是を自国に施工せんと欲せし事、七なり。」こうして、啓蒙主義の影響を第一に掲げ、次いで土地所有と免税特権を第二、ギルド制の束縛と商品流通規制の煩雑さ、を第三点、など七点を列挙し詳しく分析している。

これに対してBでは以下の通りで、叙述順序が変わるとともに若干整理され、やや簡潔なものとなっていた。

「フランス大革命は、ヨーロッパの世態を一変せる大事件なり。その原因を考ふるに、由来貴族高僧は莫大の資産を有すれども、負担極めて軽く、且種種の特権を握れるに、平民は資産乏しきのみならず、ひとり重税賦役に苦み、政府に冗官多くして統一を欠き、百弊叢起して司法行政共に紊乱し、且連年の戦争と、朝廷の華奢とは、財政をして困難の極に達せしむ。而して革新文学の影響として人人皆着実なる改革を迂遠なりとし、破壊的精神その間に満ちたるが故に北アメリカ合衆国の独立を見るに及び、フランス人はその壮挙を慕ひその制度に心酔し、国情歴史を顧みずして、直にこれに倣わんと欲し、遂に古今未曾有の大革命をひき起せり」

両叙述ともに、思想的背景や社会経済史的原因、更に国際的契機を重視している点が特徴的である。なお、箕作自身のフランス革命研究の到達点としてその集大成とも言える主著『フランス大革命史』（大正8年、1919年）では、冒頭近くで次のように述べている。「今、フランス革命の原因を大別するに下の如し。

- (1) 階級の懸隔と権利義務の顛倒
- (2) 行政司法の不統一及び紊乱
- (3) 経済上発展の障碍
- (4) 啓蒙文学の発達
- (5) 合衆国の実例
- (6) 財政困難の急迫」と。

また、ナポレオンについても、次のように二カ所（①および②）においてその評価を試みている。その叙述を、以下Aの1899年版（旧と略記）・Bの1902年版（新と略記）の順に引用してみると。

（旧①）「ボナパルト政権を握るやタレーラン、カルノー以下、人材を擢用し、カトリック教を復して国教とし、学校を刷新し、行政を敏活にし財政を整理し、有名なるナポレオン法典を編纂せしめ改良進歩の新政を布きければ、革命の惨劇に懲り且旧時の弊政復活を恐れたる仏国民に歓迎せられ国民一般の投票に依り1802年終身統領となり、1804年遂に帝位に登りナポレオン1世と称し、翌年以国の北部大半を併せて其王を兼ねたり。」

ウィーン体制への移行(1815年)期に関する叙述で（旧②）、「ナポレオンは、その直轄地並に半属国に於いて旧弊を除き新政を布き民益を起こせることすくなからずと雖、徒に大統一の理想に駆られて数百年来の歴史習慣に依り深く諸国の民心に印せる愛国の感情を激発せること悟らず、加之大陸封鎖に依り大に各国の商業を衰退せしめ物価の暴騰を来たしければ、各国民の怨恨憤激を招き、遂に帝業を破壊せしむるに至りぬ。」

（新①）「ボナパルト政権を握り、タレーラン、カルノー以下、人材を擢用し、カトリック教を復して国教とし、学校を刷新し行政を敏活にし財政を整理し有名なるナポレオン法典を編纂せしめ、改良進歩の新政を布きければ、革命の惨劇に懲り且旧時の弊政復活を恐れたるフランス人民に歓迎せられ国民一般の投票に依り1802年終身頭等（マ）統領となり、1804年遂に帝位に登りナポレオン1世と称し、翌年以国の北部大半を併せて其王を兼ねたり。」（ほぼ旧と同一）

（新②）「ナポレオンは、その直轄地並に半属国に於いて、旧弊を除き新政を布き、民益を起こせるからずと雖、イギリス打撃の大目的を貫くため騎虎の勢に乗じて、併呑を恣にし、数百年来の歴史習慣に依り、深く諸国の民心に印せる愛国の感情を激発せることを悟らず加之大陸封鎖に依り大に各国の商業を衰退せしめ物価の暴騰を来たしければ、各国民の怨恨憤激を招き、遂に帝業を破壊せしむるに至りぬ。」

ここでは 箕作の叙述上簡潔な表現法が見られるとともに、客観的叙述の長所も感じられる。その後の教科書のなかでは、例えば構成的にも目次上フランス革命に関して、第3篇近古史の第14～17章が該当する、今までの教科書での「革命時代」にあたる部分では、（第14章：「アメリカ合衆国の独立」の後を受け、またウィーン会議以降を第4篇最近史として）第15章 フランスの大革命 その1  
第16章 フランスの大革命 その2  
第17章 ナポレオン1世の業  
第18章 ヨーロッパ独立の役

と、大きく構成替えを行い、また、叙述法も変えている。「フランスは政治の腐敗社会の紊乱その極に達したるに、おりしも革新文学者出でて盛んに自由平等の説を唱へたればこれよりフランスの人民は内は王室貴族などの専横を怨み外はアメリカ合衆国の新制度を羨むに至り、革命の気運日に熟して第十八世紀の末に遂に大乱を起し延いてヨーロッパの世態を一変せり」と、「大革命の原因」の項でまとめられていた。

他方、こうした箕作独自のフランス革命観とそれに基づく叙述は、ポーランド滅亡過程に関する言及にも反映され

ていた。箕作は、フランス革命史の章に「恐怖政治」成立時1793年段階のポーランド史として次のような本文叙述を挿入している。

「(ジャコバン独裁の成立を)「所謂恐怖政治の端を開きぬ」と記した後、段落換えして(欄外頭註としてポーランド第二回分割と太字記入しp.174参照を指示)「これより先ポーランドの志士は第一分割の悲運を慨し1791年新憲法を制定し頗る見るべき改竄を実施せんとせしが、ロシアの女帝カタリナ二世は1792年トルコと和して境をドニエプル河まで広め、西方の紛擾に乗じ大にポーランドに干渉せんとし、ロシア党の貴族を扇動して新憲法に藩侯せしめ兵力を以てこれを助けぬ。ポーランドの将コッシュューシコ等奮戦して戦勝を制せしが、プロシアはロシアが独り利益を占めん事を恐れこれと同盟して伐ち1793年第二回の分割を行へり。」

「コッシュューシコ等の名士は皆他国に逃れしが、1794年密に帰国して再び義旗を挙げ上下一致して恢復を計りぬ。」

これと比較参照の上記174頁には、第一回分割に関する叙述として「ロシア、プロシアの勃興時代」の章におけるロシアのポーランド侵略を、

「1763年ポーランド王オグスト死するや己の寵臣を立ててその王としこれをせしかばポーランド人相合してこれに抗しロシアの強大を懼れるトルコの援助を得たり是に於てカタリナは先ず兵力を以てポーランドを押しつぎて水陸より進みてトルコを攻め(中略—引用者)、然るにプロシア、オーストリアの二国はロシアの独り強大なるを懼り、しきりにポーランド分割を主張し1772年三国間に第一回の分割を行ひ、各国境に接する地を略奪し、つぎてトルコとの和約も成りぬ」と記した。こうして、他の教科書編纂者たちとは若干異なり、ポーランド滅亡をフランス革命の進行過程との関わりで国際関係的にも正しく整理して叙述することに成功している。ここにはフランス革命史研究を自己の専攻分野としている箕作の長所が感じられる。

最後に、「現代史」あるいは「同時代史」とも言うべき第一次世界大戦を研究対象としており著書も刊行していた箕作が、十九世紀末から第一次世界大戦期を教科書叙述の上でどのように扱っていたのか、を確認しておきたい。

1902年刊行のBでは、まだ日露戦争・ロシア第一次革命(血の日曜日事件)・第一次世界大戦直前の時期にあたるものの、文化史を除く本文部分末尾として「第三章：世界現時の情勢・日本の位置」と題し次のようにまとめている。「第十八世紀以来世界政策に於て最も強勢なりしものをイギリスとす。フランスもまた多少活動するありたれども、勢力イギリスには及ばず、イギリスは自己の優勢なるを恃みて名声の孤立を誇れり。ただアジア大陸及びバル

カン半島に於てはロシアの勢力侮るべからざるものあり、ために、イギリスをして頗る戒心する所あらしめたり。然るにドイツの統一成るや大いに力を世界政策に致し、その製造・商業が長足の進歩をなせるとともに到る処に植民地を作ることに力め、特にアフリカ各部・アジアの南洋諸島等に両度を拓きまた膠州湾を租借し且しきりに海軍を拡張し眈々として虎視するもの如し。次にアメリカは(以下中略—引用者—アメリカと日本の位置づけを確認した後)—。かくて世界的強国はイギリス・フランス・ロシアの外に新たにドイツ・アメリカ合衆国及びわが日本の三国を加へ、その新興の勢力侮るべからざりければイギリスも所謂名誉の孤立を保つに堪へず日本と手を握りて以て従来有せる優勢を維持することを計れり。見るべし、世界の局面一変し、ヨーロッパのみ世界の中心たる形勢既に去りて世界の歴史は全く混一し、東西の文明漸く近接して將に融合の緒に就かんとするを。わが日本は—(以下略)」

こうした認識に基づく現代史重視の歴史叙述は第一世界大戦終結直後刊行の箕作編教科書での第一次世界大戦叙述につながっていく。すなわち、1919年刊のDでは、箕作自身がその年6月に『フランス大革命史』前篇を刊行した直後の7月に倒れ急逝したのであるが、教科書本文末尾の構成は次のような形に変化していた。文化史を扱う第15章を除く第14章以前は、「第4編最近史」と題して、「11：ヨーロッパ諸国の均勢／12：アフリカに於ける西洋諸国の経営／13：アジア及び太平洋諸国に於ける西洋諸国の経営」と章立てされて詳しく記された後、第14章で「世界大戦役」が添加されていた。しかもその最後は1918年の終戦講和会議まで扱い、次のように叙述して本文末尾(文化史を除く)を閉じていた。「8：パリ講和会議：かくてアメリカ合衆国大統領ウィルソンはパリーに至り、イギリスの首相ロイド・ジョージ、フランスの首相クレマンソー、イタリアの首相オルランド及びわが西園寺公望等、その他列国の講和全権委員と会して講和条約を議定し、翌1919年(本稿で利用した稿本では1819年と誤記、ここでは引用者修正)6月そのドイツに対するものまづ成れり。この条約はウィルソンの提唱によりて世界の恒久平和目的にするものにして、専らドイツに対するものの外に戦争防止のための国際連盟、労働者保護のための労働条約に関する事項を含み、わが日本はアメリカ合衆国・イギリス・フランス及びイタリアと共に連盟理事会に列することとなれり。この条約によりてドイツは巨額の賠償金を課せられ、アルザス・ロレーヌ(エルザス・ロートリンゲン)をフランスに譲り、その他著しく本国内の両度を削られ悉く植民地を失へり。また近くオーストリア・ハンガリー(マ)は分裂し、トルコはアジアに逐はれて狭小なる領土に総にその命脈を保ち、ヨーロッパには新たにポ

ーランド・チェコスロヴァキヤ・ユーゴスラヴヤなどの建国を見るに至らんとす。」

この第14章は、1：均整の破壊→2：バルカン戦役→3：世界大戦の原因→4：大戦役の経過・前期→5：日本の参加→6：アメリカ合衆国の参加→7：大戦役の経過・後期→8：パリ講和会議の順に展開され、18頁にわたって詳述し、上記のように大戦の帰結までいち早く記述していた。

## VII. おわりに

教授要目策定の前提となった調査報告書委員会委員でもあった箕作は、こうして坪井と同じように「要目」制定直後にも旧制中学西洋史教科書執筆の責を果たすことになり、更に自己の研究テーマの発展や同時代的関心も払いながら死去直前まで教科書編纂に携わることになった。箕作の場合には坪井の場合とは異なり、要目以前からも教科書編纂に携わっており、またこれ以降も大類伸に引き継ぐ形で関わり続けていきこの分野から離れることはなかった。従って、官学アカデミズムの頂点に立ち、しかも専門のフランス革命史研究から19世紀ヨーロッパ史全般にわたる広い分野に領域を広げながら専門書を多く著した箕作が教科書編纂に携わった意義は大きい。これ以降、東京大学史学科系の西洋史研究者たちが、村川堅固・村川堅太郎らに至る系譜を継承していくことになり、その出発点を形作ったという意味で坪井と同様にその影響力は無視できないであろう。

### <註>

\* 草創期の西洋史学については酒井三郎『日本西洋史学発達史』（吉川弘文館、1969年）や土肥恒之『西洋史学の先駆者たち』（中央公論新社・中公叢書、2012年）等を参照の他、特に箕作元八に関して、松島栄一「箕作元八」（永原慶二・鹿野政直編『日本の歴史家』日本評論社、1969年所収）、大野真弓『西洋史学への道——旧制高等学校教師の回想』（名著刊行会・歴史学叢書、2000年）を参照。なお、箕作については、山中謙二「箕作元八先生——西洋史学の先駆者（四）」『歴史教育』第 卷第5号、1965年6月、pp.73-74 がある。